

## 研究旅行要旨

18AR065 西田あかり

2月6日から10日間、アメリカ合衆国におけるチャイナタウンの役割の変化について調査を行った。研究対象地域にはカリフォルニア州のサンフランシスコとロサンゼルスの2都市を選んだ。サンフランシスコは、成立から160年の古い歴史とアメリカ最大規模のチャイナタウンを有する。ここでは、アメリカ華人歴史博物館にて、学芸員へのインタビューを行った。一方のロサンゼルスでは、同じく長い歴史をもつチャイナタウンと、中国系移民が人口の大部分を占めるモンレーパークを実地調査した。またロサンゼルスチャイナタウン内の市立チャイナタウンランチ図書館にて資料研究も行った。

これらを通して、観光や住宅環境、教育といった点から、チャイナタウンが誰にどのような役割を供給しているのかについて研究を深めていった。

2016 年度 研究旅行奨励制度 報告書

# アメリカ合衆国におけるチャイナタウンの役割

18AR065 西田 あかり

## ■研究目的

現在、中華人民共和国（以下、中国と略記）は13億もの人口を有する大国であるが、この地域の人々は、古代から世界各地に移り住んでいった歴史がある。19世紀以降は、移民国家として知られるアメリカ合衆国（以下、アメリカと略記）にも多くの中国系移民が流入した。一般に、中国系移民の低賃金就労や独特の生活習慣などが、白人主流社会からの激しい差別を生み出したといわれているが、第一波の中国系移民たちは、自己を外敵から守るためにチャイナタウンでの集団居住を始めた。彼らは劣悪な労働条件の中で懸命に働き、19世紀末におけるアメリカ経済発展の一つの原動力となると共に、都市の発展に従って自分たちの生活コミュニティであるチャイナタウンを拡大させてきた。とはいえ、第一波の移民を先祖に持つ後代の華人たちは、経済力が上がるに従って社会的・政治的地位も向上し、従来の生活習慣を捨てて米国社会に同化しようとする人も多い。

2010年の国勢調査<sup>1</sup>によると、ニューヨークのチャイナタウンの人口は9%減少し、その他の都市のチャイナタウンでも年々人口は減少の傾向にある。これには、中国本国の経済発展や一人っ子政策の開放といったプッシュ要因の変化も指摘される。いずれにせよ、アメリカンドリームを抱いて移住してくる人々や、チャイナタウンに住み続ける人々が減少していることは間違いない。かつて様々な希望を持ってアメリカに渡って来た中国系移民にとって、コミュニティとしての重要な役割を果たしていたチャイナタウンは、現在どのようにその役割を変えつつ存在しているのだろうか。

## ■研究手段

研究地域には、アメリカ最大規模のチャイナタウンを有するといわれるサンフランシスコと、同じ西海岸に位置するカリフォルニア最大の都市ロサンゼルス<sup>2</sup>の2都市を選んだ。サンフランシスコではアメリカ華人歴史博物館を訪れ、学芸員へのインタビューを敢行した。ロサンゼルスでは、博物館の他に新チャイナタウンと言われるモントレイパークの視察、チャイナタウンブランチ図書館にて資料研究を行った。

## ■日程

	滞在地	内容
2月6日	福岡→ソウル→サンフランシスコ	移動
7日	サンフランシスコ	チャイナタウン(フィールドワーク)

<sup>1</sup> Bonnie Tsui "The End of Chinatown" in *The Atlantic*, OCT 28, 2011.

<http://www.bonnietsui.com/articles/the-atlantic/the-end-of-chinatown/>

8日	サンフランシスコ	アメリカ華人歴史博物館 (Chinese Historical Society of America)
9日	サンフランシスコ	チャイナタウン(フィールドワーク)
10日	サンフランシスコ→ロサンゼルス	移動
11日	ロサンゼルス	チャイナタウン(フィールドワーク)
12日	ロサンゼルス	モントレイパーク
13日	ロサンゼルス	華美博物館(Chinese American Museum)、チャイナタウンブランチ図書館
14日	ロサンゼルス	チャイナタウン(フィールドワーク)、チャイナタウンブランチ図書館
15日	ロサンゼルス→ソウル	移動
16日	ソウル→福岡	帰国

はじめに

アメリカにおける最初の中国系移民の流入は19世紀にまで遡る。彼らは1848年、カリフォルニアでゴールドラッシュが起こったことをきっかけに、一獲千金を夢見てアメリカの地を目指した。最初の上陸地点がサンフランシスコであったために、数年後には25000人も中国人が住むようになり、大規模なチャイナタウンが形成されていった。しかしカリフォルニアにおけるゴールドラッシュは数年で下火となる。これに代わって、大量の中国人が大陸横断鉄道の建設工事に従事した。彼らのほとんどは、広東省の出身者であった。大陸横断鉄道が完成すると、新しい職を求め、大都市へ移動していった。低賃金で勤勉に働く華中国人は、多くの白人労働者からは賃金の低下を招く好ましくない存在であった。また、英語も話せず、文化や生活習慣も大きく異なる中国人に対する排斥運動が高まり、1882年、中国系移民のアメリカへの入国を禁止する華人移民排斥法がカリフォルニアで制定された。このような中国系移民を取り巻く厳しい環境の中で、チャイナタウンは、白人からの排斥を免れる一種の避難所の役割を果たした。彼らはチャイナタウンで集団居住することで、自らの身の安全を確保しようとした。一部の移民は、反華感情が充満したカリフォルニアを離れ、シカゴやニューヨークなどの都市へと移動していくようになった。<sup>2</sup>

<sup>2</sup> 山下清海『チャイナタウン 世界に広がる華人ネットワーク』丸善ブックス、2000年51-52項参照

以上のような背景を持つチャイナタウンが現在果たしている役割について、観光や住宅環境、教育といった点から明らかにしていきたい。

## 1. サンフランシスコ

サンフランシスコのチャイナタウンについて考えるにあたっては、まずサンフランシスコという都市の特性を考慮する必要がある。同市には中産階級や富裕層だけでなく、様々な人種・文化・ライフスタイルのマイノリティが住まう近隣地区が至る所に分布している。これは現代アメリカの大都市としては珍しく、非常にコンパクトな街といえる。

実際に、ホテルのあるダウンタウンから北へおよそ 2.7km の海岸沿いのフィッシャーマンズワーフまで約 40 分かけて徒歩で移動するだけで、西海岸を代表する金融街であるファイナンシャルディストリクト、チャイナタウン、イタリア系移民が多く暮らすノースビーチの三つの近隣地区を通過した。街路のアップダウンが激しいサンフランシスコでは、丘を越えれば別のマイノリティが居住している。このように多様な近隣地区が数多く存在しているのが、ほかのアメリカの都市とは異なる点である。この特性が、サンフランシスコを世界有数の観光地たらしめている。

### (1)チャイナタウン



サンフランシスコのチャイナタウンは、市の中心部に位置し、コロンブスアベニューおよびカーニーストリート、ブッシュストリート、パウエルストリートに囲まれた 24 ブロックからなるエリアである。ダウンタウンからグラント通りを北に進むと、牌楼と呼ばれるゲートが見える。ゲートをくぐると頭上にはいかにも中国らしい赤提灯、道幅 10 メ

写真1 SFチャイナタウンの牌楼 撮影者：西田

ートル程の車道の左右にお土産店、骨董店、ホテルが立ち並んでいる。入り口付近は中国系以外が働いていると思われる店もちらほら伺え、観光地化が進んでいるように見えた。

さらに歩みを進めると、視覚や聴覚や嗅覚から、アメリカにいることを忘れてしまうほど、中国を感じる事ができた。色鮮やかな配色の店の看板、あちらこちらで聞こえる中国語（広



写真3 ポーツマススクエアにてカードゲームをしている老人たち 撮影者：西田

東語)、漂う漢方の独特な匂い。日本の中華街のような歩行者天国ではなく、車やバスの交通量が非常に多い。交通量が最も活発になる夕時には、夕飯の買い物をする大人や、チャイナタウン内に所在する学校から下校する子供たち、さらには中華料理を食べにやってくる現地の人や観光客で、時には詰まって進めなくなるほどいっぱいになる。この時点で、この町のチャイナタウンは衰退などしていないじゃないか、という意識を持った。しかし、通りを歩く大部分が若者ではなく、高齢者であることに気が付いた。



写真2 グラント通り 撮影者：西田

2010年の国勢調査によると、全米とサンフランシスコの平均と比べて、チャイナタウンにおける60歳以上の人口は非常に多く、単身世帯の比率が高い。今日チャイナタウンの主要な住民は、年老いた単身の中国系アメリカ人労働者および、新しくアメリカに渡った中国系移民とその家族であることがうかがえる。

項目	全米	サンフランシスコ市	チャイナタウン
人口(千人)	308,746	805	15
人種構成におけるアジア系アメリカ人の比率	5%	33%	84%
外国生まれの人口の比率	13%	36%	84%
60歳以上の人口の比率	18%	19%	35%
世帯数	117,538,000	345,810	7,410
18歳未満の子供がいる世帯の比率	34%	18%	15%
単身世帯の比率	31%	39%	47%

図1 人口及び世帯特徴について 2010年(ビイ・タオタオ『チャイナタウン ゲイバーレザースブカルチャー ビート そして街は観光の聖地となった「本物」が息づくサンフランシスコ近隣地区』 P64より引用)

インタビューに答えていただいた Pam Wang 氏(アメリカ華人歴史博物館、学芸員)によると、サンフランシスコのチャイナタウンは現在でも、歴史的な背景から、英語を話せない中国からの移民が最初に居住地として選ぶ場所である。そのため、サンフランシスコにおけるチャイナタウンの人口は減少しているわけではない。2,3年住んで、言語を習得してからチャイナタウンの外へでていくという若者は少なくない。サンフランシスコのチャイナタウンはアメリカ社会へとつながるゲートとしての性格をもっているといえるだろう。



写真4 チャイナタウンにおける集合住宅  
撮影者：西田

また、路地に入ってみると、集合住宅がひしめき合っている様子が分かる。1970年以降、チャイナタウンはサンフランシスコ市において人口密度が最も高い近隣地区となっている。チャイナタウンにおいて、一戸建て住宅に居住する住民は全住民の3%にすぎずほとんどの住民はSROと呼ばれる、チャイナタウンの代表的な集合住宅で生活している。SROとは、Single Resident Occupancyの略で、おおよそ長さ3メートル、幅3メートルのワンルーム住宅のことを指す。住民たちは、共同のキッチンやバスルームを使う。Pam Wang氏によると、住宅問題はチャイナタウン居住者がチャイナタウンを出るきっかけの一つである。しかし、所得が低い、あるいは英語を話せない移民にとっては、チャイナタウンの家賃の低いSROに居住するほか選択肢はない。現在、非営利団体や活動家が、居住状況

を改善するよう市当局に訴え、低所得者向けの住宅を開発中だ。

次に観光についてであるが、言うまでもなく観光は、サンフランシスコチャイナタウンの重要な財源の一つである。またサンフランシスコ市にとっても、チャイナタウンは良い観光材料の一つで、サンフランシスコを訪れる多くの観光客がチャイナタウンを観光スポットとして選んでいる。週末には、観光客だけでなくチャイナタウン外に住む中国系アメリカ人も家族で遊びに来るなど、その文化体験的役割は非常に開かれたものとして存在している。

## (2)インタビュー —アメリカ華人歴史博物館 Pam Wang氏

アメリカ華人歴史博物館にて、インタビューをさせていただいた。インタビューに答えていただいたPam Wang氏は、米ロサンゼルスに居住歴のある、中国系アメリカ人である。彼女は博物館の学芸員として働きながら、チャイナタウンに居住する移民のサポートを行っている。以下、インタビューした内容を適宜交えながら、報告書をまとめていく。

## 2. ロサンゼルス

最初の中国人がロサンゼルスに上陸したのは、1852年のことである。1870年までに確認されたチャイナタウンは、カル・デ・ロス・ネグロスの幅 50 フィートの短い路地に位置し、200 人以上の中国人が家<ジャー>と呼ばれる小規模区画に住んでいた。彼らのほとんどは男性の広東人で、洗濯屋や農家、庭師、建設業者として働いていた。ビジネスで成功を収めると、チャイナタウンは領域を拡大し、居住区域だけでなく、三つの寺院や病院、電話交換所を含んだ商業区域として隆盛をきわめ、人口も 3000 人にまで達した。しかし、排華運動が強まると、中国人による土地や資産の所有も禁止され、チャイナタウンは衰退していった。そして 1933 年、ロサンゼルス市は強制的に居住者をおいたてて、ユニオン駅を建設するために“オールドチャイナタウン”は大部分を破壊された。今日のロサンゼルスチャイナタウンは、1938 年に新しく完成したニューチャイナタウンを指している。<sup>3</sup>



写真 5 1900~1930 年のオールドチャイナタウン  
(華美博物館展示)

### (1) チャイナタウン



写真 6 LA チャイナタウンの牌楼 後ろには集合住宅 家<ジャー> 撮影者：西田

ロサンゼルスチャイナタウンは、ダウンタウンの北部にあり、ユニオン・ステーションに隣接している。印象としては、道幅は広く、建物が密集していないため、サンフランシスコチャイナタウンとは違って開けているなど感じた。牌楼の入り口付近は、新しく清潔な印象の集合住宅家が数棟建てられていた。その奥には、飲食店や土産屋や銀行等が並び、人気のレストランは、中国系アメリカ人はもちろん、観光客らで賑

<sup>3</sup>華美博物館展示、LA Chinatown 公式サイト [chinatownla.com](http://chinatownla.com) 参照



わっていた。チャイナタウンの中心に構える、以前のオールドチャイナタウンの風情や建物を残したオールドチャイナタウンというスポットは、サイクリングや和太鼓の演奏会といったイベントが開催されており、こちらも同様に賑わっていた。

しかし、サンフランシスコチャイナタウンで指摘した高齢者の占める割合については、あてはまらないように見えた。実際に、30歳未満が40%近くを占め、60歳以上は15%以下<sup>4</sup>であることから、ロサンゼルスチャイナタウンは、高齢者が多くを占めていたサンフランシスコチャイナタウンとは違って、若年層で組織されていることが分かった。これは教育の機会が要因となり得るのではないだろうか。教育水準について調べてみると、サンフランシスコチャイナタウンの25歳以上の人口の大学進学率が30%以下<sup>5</sup>であるのに対して、ロサンゼルスチャイナタウンでは半数以上<sup>6</sup>であった。ロサンゼルスチャイナタウンでの居住の結果がこの数字なのか、よりよい教育をさせたいからロサンゼルスチャイナタウンに居住するのか、または元々学のある移民がそこに居住するのか、どれも考え得るが、いずれにせよロサンゼルスチャイナタウンが教育の面で魅力的であることは共通している。

先にインタビューした Pam Wang 氏も、同じカリフォルニアでも両チャイナタウンが違う特徴を持つ点として、ロサンゼルスチャイナタウンに居住する人々は、教養があり、それによって良い仕事を得ることができ、比較的裕福であることを挙げていた。

## (2) モントレーパーク



写真7 モントレーパークの大通り 撮影者：西田

ロサンゼルスには郊外型チャイナタウンと呼ばれる新チャイナタウンがいくつか存在するが、その中の一つであるモントレーパークにて視察を行った。モントレーパークはロサンゼルスチャイナタウン、ダウンタウンから東に10マイルほど離れたロサンゼルス郊外に位置する町である。サンフランシスコやロサンゼルスチャイナタウンとは異なり、牌楼もなければ観光客もいない。ただ、見渡す限り中文と英文の表記がされた店の看板と、すれ

違う人々ほとんどがアジア系であること以外は、典型的なアメリカの住宅街といった印象だ。道幅は非常に広く、静かで、今まで見てきた二つのチャイナタウンのような騒がしさ

<sup>4</sup> LA Chinatown 公式サイト参照 [chinatownla.com](http://chinatownla.com)

<sup>5</sup> ビイ・タオタオ『チャイナタウン ゲイバー レザーサブカルチャー ビート そして街は観光の聖地となった「本物」が息づくサンフランシスコ近隣地区』65項参照

<sup>6</sup> LA Chinatown 公式サイト参照 [chinatownla.com](http://chinatownla.com)

は皆無だった。



写真 8 市庁舎前に設置されている中美軍民合作記念碑  
撮影者：西田

現在の総人口のうち 66,9%がアジア系で、そのうちのほとんどが中国系である。再び Pam Wang 氏によると、モントレイパークに代表される郊外型チャイナタウンの特徴は、高等教育を受けた高所得者が多く居住していることだという。彼らの多くはアメリカ社会に同化し、アメリカ人として生きていくか、祖国の将来を担うエリートとして期待されている。また、近年になって、本国で幼少期から英語を習い、金銭的にも余裕のある移民は、住環境も整っていない伝統的チャイナタウンに住もうとはせず、個人で家を探すか住みやすい環境の整った郊外型のチャイナタウンに住むようになった。中国本国の経済成長により、このような形のチャイナタウンは増え続けているそうだ。



写真 9 モントレイパークの住宅  
撮影者：西田

おわりに

伝統的なサンフランシスコとロサンゼルス、そして新しいモントレイパークの 3つのチャイナタウンを回ったが、それぞれに共通点と相違点があった。まず 3つのチャイナタウンに共通するのは、移民にとってのコミュニティとしての役割だ。チャイナタウンがアメリカにおいて成立した背景に見られるように、同じ出自を持つ者同士が、集団で居住することで、ひとつのコミュニティとして他の勢力に立ち向かうことが可能となる。また、チャイナタウンのコミュニティの結束には、中国人の血縁や同郷の絆を重視する考えが関連していると考えられるだろう。

次に相違点について、まず教育と住環境においては、サンフランシスコ、ロサンゼルス、モントレイパークの順で、良い教育を受けているほど住みやすい環境があることが分かった。英語が話せない中国系移民にとって、サンフランシスコのチャイナタウンは仕事

やアメリカ社会へとつながる経由地を提供する役割を持つ。また、よりよい教育をもとめてやってきた移民にとって、モンレーパークの新チャイナタウンは、アメリカ社会に同化する機会を与えつつ、中国系コミュニティを提供する。このように、チャイナタウンはそれぞれの移民のニーズにあった役割を提供している。

一方、観光という点においては、伝統的なチャイナタウン（サンフランシスコ・ロサンゼルス）と郊外型チャイナタウン（モンレーパーク）で大きく異なる部分があった。郊外型チャイナタウンは、住民の高い能力や専門性によってチャイナタウン内に限らず仕事をしており、住民に共通した住居エリアや食のコミュニティはあっても、仕事や教育のコミュニティは異なる場合が多い。しかし、伝統的チャイナタウンの場合は、高い割合で、住居、食、仕事、教育といったコミュニティが一貫している。よって、そのコミュニティの本物性に、観光客は惹かれるのではないだろうか。

上述のようにチャイナタウンは、100 あれば 100 通りの特徴があり、一口に衰退しているといっても、あらゆる当事者の視点からするとその指摘は必ずしも事実ではないということに気づいた。たしかにいくつかの大都市のチャイナタウンの居住者は年々減少してきている。しかし、今やその役割はチャイナタウンに住む中国系アメリカ人に限るものではなく、チャイナタウン以外に住む中国系アメリカ人、ないしは現地アメリカ人または観光客といった具合に、いわば誰もが享受できるものなのだ。第一波中国系移民によって形成され閉鎖的な性格を有していたかつてのチャイナタウンは、時代と共に万人に開かれるオープンな中国系居住地区となったのである。そしてこれから、さらなるグローバル化時代に向けて新たな特徴をもったチャイナタウンが次々に誕生し、チャイナタウンの形態は変容し続けるのであろう。

#### ■参考文献

- ・山下清海『チャイナタウン 世界に広がる華人ネットワーク』 丸善ブックス, 2000年
- ・ビイ・タオタオ『チャイナタウン デイバー レザーサブカルチャー ビート そして街は観光の聖地となった「本物」が息づくサンフランシスコ近隣地区』 白桃書房, 2015年
- ・LA Chinatown 公式ホームページ [chinatownla.com](http://chinatownla.com)
- ・モンレーパーク公式ホームページ [www.montereypark.ca.gov](http://www.montereypark.ca.gov)
- ・Bonnie Tsui "The End of Chinatown" in *The Atlantic*, OCT 28, 2011.  
<http://www.bonnietsui.com/articles/the-atlantic/the-end-of-chinatown/>